

すてきでだめな、愛の夢とか

川上未映子

愛 etc.

小説を書き始めて5年がまるっと終わり、まだ5年しか経ってないの、や、もう5年も経ってしまったの、という気持ちと、その両方が混ざりあった感覚でいるこの春に、はじめての短編小説集を刊行することになりました。これまで発表してきた短編小説からムードとトーンの合うものを選んで書き足したり削ったり、それから、「こ、これ以外のならばはないな」とやっとな確信できるまであれこれ試してひとつの流れにのったそれぞれの小説の輪郭をさらに整えていく—そんなふうにして一冊にまとめあげてゆく作業は、音楽のアルバムを作る過程を思いださせたりもして、詩集やエッセイや長めの小説を編むのとはまた違った楽しさがあり、とくべつなひとときを過ごすことができました。

短編小説と長編小説を書くときには何が違うのですか、とインタビューなどで訊かれることが多いのだけれど、そのたびに少し困ってしまう。というのも、そのふたつを書くことは、まったく違うし、まったく変わらない、というふたつの異なる実感が同時にあるからです。なので、違いについて考えることはそんなに重要なことでもないようなそんな気持ちだったりしますが、しかし短編小説を書くのは手放しに楽しい。どこまでも楽しい。長編小説を書くときにこんなこと、思ったこともなければ感じたこともありません。書きあげるのに数年はかかる長編がまるで禁錮刑のようなあんばいなのに対し、短編はちよつとしたバカンスにでもかけるような鮮やかさとしあわせがあります(…禁錮刑もバカンスも知らないのだけれど…)。これから書かれる数十枚の数のなかでつかのま、あるいは延々と練り広げられるかもしれない物語のことを思うと、あるいはアツと息を吸い込むように切りあげられる物語のすそのことを思うと、書いても書かなくてもそのしあわせになんだかどこかがいっぱいになって、それがけっこう気持ちよく、もういつそ書いても書かなくてもどっちでもいいや、自分が書かなくても世界には短編小説がものすごくあるのだし、と思えるほどに、もう存在している×まだ存在してもしない、そんな短編小説のことを思えばそれだけで悦びが満ちてくるのでじっさいの執筆がとんとすすまず、だめなことです。

夢 etc.

何も起こらなかった今日。何も起こらない明日。おととしの三月の天変地異を経てさえ、あるいは個人的な、取り返しのつかない大きな出来事を体験したとしても、見ようと思えば日常はそんな気だるさと直線に塗りつぶされています。絶望にも、何もなさにも、気がつけばそんなのっぺりとした直線がひしめいてしまいます。けれどそんな中にも、何かが動く、ドライブのかかる瞬間があつて、たぶん、その多くはともささやかなことで、他人にとつても、そして自分にとつても、おそらくはさしたる価値もないようなことばかり。そしてまた、少しの時間が経てばいつもの日常の運動のなかへもどつてゆくんだけど、でもそのとき何かが動いたことはたしかなこと、その瞬間の詳細を、手触りを、できるだけたくさんつくりたいのだなと、そして、読みたいのだなと、あらためてそう思い、『愛の夢とか』はそんな瞬間を7つの物語に光らせた、一冊になりました。

言葉でつくりあげられたそのたくさんの嘘が、現実と地続きである必要は必ずしもなくて、見ようとすればそういつた瞬間が存在するかもしれないということを耳元で静かに叫ぶことが、フィクションの無数にあるちからのなかの、ひとつだと思えます。そのちからが誰をどのような場所に連れてゆくことになるのか、あるいはならないのかは、わからないけれど、ただ、何かが動くその瞬間のちからは、まるで何の役にもたたず、目的を持たない夢にふれるような気持ちにも似ていて、すてきなことです。